

透析治療のイメージと今後の課題

石橋 由孝*

腎臓内科医師として透析治療の現場にはじめて身をおいたのは、1996年の茨城県の病院勤務時代でした。だいぶ以前のことなので記憶が薄れていますが、「集団治療している」「とても太い針を刺されて痛そう、毎回は大変に違う」と思ったことを印象的に覚えています。その後、中堅時代には東京や神奈川の大病院や多くのクリニックで透析治療の経験を重ねてきましたが、悪い意味での慣れも出てきてしまったような気がします。ベテランと呼ばれる年齢になった現在は、一人ひとりの患者と話をするとともに、若手医師やコメディカルを通じて患者をみることも多くなったような気がします。若い先生やコメディカルの人たちの様子を見てみると、透析治療中の患者の自宅での生活・家族のこと・将来の不安など、むしろ治療以外のことを当たり前のように話している光景を目にすることが多く、私の透析のイメージも治療から生活の一部へと変化してきました。

今や日々当たり前のように実践されている透析医療ですが、考えてみれば日本の高い技術や質の高い保険制度に支えられています。近くのアジアの国々の腎臓内科の先生方と話をしてみると実感します。かつては腎臓という重要臓器の機能不全後も長期生存するとは信じられないことだったと思います。諸先輩方の努力には敬服いたしますし、治療とともに生きられた患者の人たちには畏敬の念を感じます。

* 日本赤十字社医療センター腎臓内科

人工知能が進歩し、諸々の仕事が代置されていく時代、といわれます。慢性疾患の時代となった透析医療の現場ですが、患者や家族との長いかわりのなかで実に多彩な人間模様に触れることができます。

医師になったばかりのころとはイメージと異なることが多いですが、ロボットで代置できない仕事が多いのではないかと、そこがやりがいでもあり腕の見せどころではないかと、本稿を書かせていただき、「初心忘れるべからず」と思いました。